

巢立ちの冬

小沢
清

冬の立ちの巣

小沢 清



昭和46年9月1日

第一刷発行

定価 六八〇円

著者 小沢清

発行者 藤山真人

発行所 株式会社東邦出版社

東京都千代田区神田神保町二〇二八
電話 東京(二六二)五七二五、七
振替 東京 八五二七五

印刷・日大印刷 製本・美成社

© 1971

巢立ちの冬

目次

巢立ちの冬 5

油の中 39

鉄の学校 87

空白の手帳 201

装幀 一の宮慶子

巢立ちの冬

昭和十年の秋だった。代吉はいまの品川区東中延なかのよの帝国プレスという、ラジオ部品を作っている工場に勤めていた。牢屋のように頑丈な鉄パイプの門と、工場の事務所をかねたニスぬりの帳場だけが立派だった。いつでも門の塀には見習工募集の、はげおちた看板はでていたが、小学校六年をでたばかりの代吉の賃金は三十五銭で、米一升の値段より安かった。

帳場と棟つづきの裏は工場主の家になっていて、井戸ばたをあいだにして、さびたトタン屋根の見えるからに貧弱な工場があった。工員は三十五人ぐらいで職場は二つに分かれ、一段高くゴザをしいたほうが調整部で、巻線、ハンダ付、部品組立などやり、頭をポマードで光らせた男のチラホラいる中で、十人ほどの女工がせわしそくに働いていた。

そこと低い板で区切ったほうが仕上部で、ケトバシという足で蹴とばす式のプレスが十台ほどならび、ほそく裁断した真鍮板や、燐青銅、鉄、ニウム板などをガッチャン、ガッチャン音をたてて抜きおとしていた。コンクリートの床は油カスでどす黒く、作業服も、電球も、人間の顔までが、うすぎたなく暗く見える職場で、このつやのある金属だけがキラキラとかがやき、まるで洞窟の中で金貨のような宝物をいじっているように見えた。

代吉はケトバシと通路をさかいにネコを使っていた。ネコというプレスは右手でハンドルを動かして、左手で品物をだしいれするため、背中がイヤでも猫背になり、そんな理由からネームがついたのかもしれない。ネコは機の半分ぐらい低い台に六機つけてあったが、仲間は代吉をいれて四人で、ケトバシが十六、七から二十代、ネコは十五歳以下だった。この年齢のちがいは代吉たちを多忙にさせた。つまり、朝は油さしや練炭いれ、昼は湯わかしにお茶いれ、夕方は掃除、そのほか走使いから材料運びまで、雑用はなんでもやらされた。

左側は仕上台で、すみにやせた四十ほどの腕のいい職長がいて、となりの万力には同年ぐらいの職長補佐がいた。それに二十一、二の仕上工がふたりいて、仕上台から右側の井戸ばた近くにある手動フイゴ、ベルトのかかったボール盤、裁断機などを使い、部品の箱や抜きカスのちらかった通路を、スバナやハンマーを手にして、一日中、いったりきたりしていた。この四人を現代ふうにいえばスタッフということになり、仕事に責任をもつ立場にいたが、代吉たちをおどかすことはめったになかった。

けれども、代吉の職場は働きにくかった。ネコの仲間に山吹という、牢名主に似たボスがいて、自分だけラクな仕事をしたり、新入がくると、いまましい渾名あだななどをつけるからである。

まずウニコという渾名の鶴野がいた。やせてひよろ長で皮膚がカサカサしていて、鶴野のとなりのネコで風下だと、かわいたヒリヒリした悪臭がしてきて、頭のシンまで痛くなってくる。つぎに舌長したなががいた。姓を南川といい、十以上の算数ができず困っていた。色白で目もきれいなのだが、うりざね顔のくちびるがぬれていた。ある昼休み、ボスの山吹がいった。「おい、みんな、胃の検査をしてやる。舌をだしてみろ」代吉たちがいわれたとおりにすると、南川はアゴのあたりまである舌をだした。そこでボスの山吹が南川を舌長とよぶようになった。

山吹は代吉にとっても不愉快な存在だった。九月のはじめのころ、代吉たちが一列に低いイスに腰かけてネコにかじりついているとき、山吹は代吉にこう話かけてきた。

「おまえのオヤジ、死んだのか？」

代吉は肌寒い手でさわられたようにヒヤリとした。代吉の父はスリの常習犯でいま府中刑務所にいた。他人の物を盗むという行為は、どんな事情からでも許されぬと代吉は信じている。しかしそう信じている代吉の心とはアベコベに、父と代吉の血が一つだという事実が、代吉を苦しめないでおかなかった。

「……生きているよ」

代吉は低い声で答えた。ここで代吉は山吹に「父は死んだ」と嘘をついてもよかった。けれども、犯罪者を父にもつ代吉は不正直であることが、たまらなくイヤだった。その結果、自分で自分の首をしめるハメになっても、どうすることもできなかった。

「——そうすると」

山吹はたたみこんできた。

「生きていてよ、家にいないというと、これやっただろう」

山吹はするそうな目で、色の黒いソバカスだらけの丸顔を代吉のほうに向けて、人さし指をコの字に曲げた。

「……………」

代吉はぐっと胸がつかえた。代吉は病弱な母とふたりきりの生活で、代吉の賃金が主収入のため、朝は塩からい味噌汁だけ、夜はキャベツの油いためか、よくて魚のアラだった。それでもいま山吹が代吉を中傷したことほど、代吉の自尊心に打撃をあたえはしなかった。山吹は代吉の弱点をぎゅう

つとにぎりしめた。しかも、それ以後、ごくあたりまえの調子で、代吉を監獄、とよぶようになった。「おい監獄」

代吉は仲間から簡単に、そんなふうによばれるたび、周囲が真暗になった。それは代吉の父の前科が一度や二度ではないという理由にもよる。代吉の記憶でも六つのとき家に刑事が踏みこんできた。そのときは自白しないため、二週間ぐらいで帰ってきたが、ヒゲぼうぼうでやせほそり、道場でオモチャにされたという。小学二年のときは現行犯で監獄へ、小学校四年のときも現行犯で監獄へ、そしていまも監獄へはいつていた。代吉は職場でつとめて平気な顔をしていたが、一日として神経の休まる日はないようになった。

「おい鼻穴」

代吉は辛抱できずに反撃した。山吹の鼻は天井を向いていて、しかも大きかったからである。すると山吹は流し目で代吉を見て、

「いいのか？ おれ様に向って、そんなことをいってよ」

と、さげすむようにいった。山吹は仲間に渾名をつけるが、自分だけは本名でよばないと怒る。怒るという内容にはふくみがあつて、渾名のほかに仕事で相手を窮地に追いこむ方法であり、山吹はこれを実行に移してきたのだった。

代吉たちはギルド的だが、一種の流れ作業をやっていた。真空管をさしこむほうのパネじかけの受金で真鍮できていたが、大と小の穴あけ加工二回、横と縦の曲げ加工が二回の四工程になっていた。この四つの工程のうち、べらぼうにいそがしいのは二回めの穴あけで、それはつぎの曲げ加工がひどく単純だったためである。ふだんは職長補佐が仲間をひきぬいてターミナル、ファイバーなどのケトバシ仕事をあたえるのだが、それは古参の山吹がきめるシキタリになっていて、その日は代吉が

二ばんめの、いそがしいネコでせっせと仕事をしているときだった。

「おい、居眠りがでらア」

つぎの曲げ加工にいた山吹が、代吉のほうに首を曲げて、ノドちんこの見えるほどの大あくびをした。

「なにをいうんだ。貯金、しているくせに！」

代吉は反発した。「貯金」というのは股の下に空缶をおいて、代吉の穴あけした品物をためてゆく方法のことで、そうなると山吹のつぎの鶴野は暇になるし、代吉もシヤクだから速度をおとす。一ばんめの南川もノンビリしてくる。ケトバシがダイナミックな音をたてているのと反対に、ネコの仲間らはだらだらと遊び半分に見えてくる。職長補佐は山吹が「手があいた」と報告しなければ、動こうとせず、代吉に運がないのは、こういうときに工場主が巡視にくるからだ。

工場主は中肉中背の三十五、六で、いつも濃いヒゲをそりあげて、口の回りとアゴを青々させていたが、油断のならぬ目つきをしていた。代吉たちはこの工場主をケチケチとよんでいた。しみったれも徹底していて、掃除の終わったあと、米粒ほどの真鍮の抜きカスがおちていたりすると、にがりきつた表情をして指さす。おかげで代吉たちは退の五時半から六時まで、なんの報酬もなく掃除をやらされるようになった。

工場主のもう一つの特徴は陸軍中尉で、十日に一度ぐらい外出するが、職場に顔をだす必要もないのに、ボタンや肩章の光った軍服で巡視した。代吉は小学生のころ戦争の記念日になると講堂に集められて、弁舌の達者な将校から二〇三高地の乃木大将の話や、日本海海戦の東郷元帥の話を半日もきかされて感激したものだ。けれども、いま代吉の目のまえにいる工場主は、まるで敵の将校のようで、代吉の軍人にたいするイメージを混乱させる役を演じていた。その工場主が代吉のまえあたり

で立ちどまると、

「おそいなア、おれなら倍も早いぜ」

山吹が大声で代吉を非難した。たしかに山吹の仕事は早いが倍ということはない。しかも、同じ境遇の仲間を、自分さえ毛ぎらいしている工場主に売った。そのうらぎりは代吉の感情を強く刺激せずにはおかなかったが、こんなとき、代吉はしいたげられている者の知恵で、相手の長所を思いだすことにしていた。山吹は源平飴といって、紅白の砂糖の中に南京豆のはいった、じつにおいしい飴を代吉たちに分配してくれることがあった。また、工場主にケチケチという渾名をつけたのも山吹だった。

代吉が身動きしなかったので工場主は去ったが、いれかわりに、職長がツカツカッとやってきて、代吉のネコ台に片足をかけると、

「オヤジの目の光っているときに、もたもたするな、バカヤロー」

と、代吉をおどした。代吉は当惑した。この目とアゴのほそい、青白い顔をした職長に、なんとなく代吉は親しみを感じていたからだ。それは万力にくわえた鋼鉄にびったりとヤスリがのるのを見ても、職長の過去の人生のきびしさが目にしみるようで、そのスタートにいる代吉にも理解できたからである。

代吉が職長におどかさされて、失敗を挽回するため仕事に熱をいれはじめると、山吹は貯金しておいた品物を、高いところから代吉の箱にザラザラッとおとして、

「やい監獄、まいったろう。もう、おまえの賃金はあがらねえや」

と、かぶせるようにいった。山吹は大きな誤算をしたといわなければならぬ。なぜなら、代吉はふるえがくるほど怒ったのだ。代吉は職長に弁解しなかった。その代吉の仲間意識を逆手にとつて、代吉の生活と父の秘密をバクロする山吹に、代吉は理性を失った。人は激しく怒ると相手の長所や、自分

の生活など考えなくなるものだ。代吉もそうで、山吹のエリ首をつかんで通路にひきずりだした。

「おい、やめなにか！」

黒のベレー帽をかぶった職長補佐が、おどろいたような声をだした。すると職長がつづけてどなった。

「やらせろ！」

職長のことは鶴の一声といいいい。職長は職場の実力者で熟練工の希少価値と、自分できずきあげた人格というものをもっていた。それに比較すると、職長補佐は見習工からたたきあげた職人ではなく、文盲の職長の代筆をしたり、品物の数の計算をしたり、つまり、職長補佐は学があったわけである。

代吉と山吹とは金属で光った木箱や、石油缶のいてあるせまい通路にもつれあいながら床に転がった。代吉の頭には遠くから職長のことが激励のようにきこえていて、一段と勇気がでてきていた。山吹は代吉より一つ年うえて、体格もひとまわり大きかったが、代吉は骨太だったし、抑制しようにもない怒りの渦の中にいたから、その対決の心がまえの点で、かなりのちがいがあった。どれほどの時間がたったのか、はじめ、いきおいのよかった山吹を代吉が組みふせると、山吹はぐんにやりして、それから腕を目にあてて泣きだした。

「おめえ、あんがいだらしがねえなア」

職長がふぞろいの歯を見せて笑った。山吹は合なしになったが、代吉もけっしていい気もちではなかった。考えてみれば代吉にしろ、山吹にしろ、だれが好きでこんな工場にくるものか。代吉は仲間どなたの南川から、山吹の父が大酒のみの土方で、夜中に使いにだされる話をきいていた。代吉は山吹との戦いを後悔はしなかったが、代吉たちは麦の半分もある弁当をたべ、重い金属板をかつがされ、井戸

で手を洗うのも六時すぎで、顔のかたちや背だけはちがっていても、職場生活の圧迫は同質のものであった。兄弟のいない代吉は、たとえばがみあったとしても、母のつぎに位置する友人たちだと思っていたのである。

この事件があつてから山吹は無口になった。代吉はぎごちない感情になり、心配もしたが、山吹は代吉にあてつけている様子でもなく、代吉も自分の行為を鼻にかけををしなかった。そういう代吉の心づかいがよかったのか、二、三日たつと山吹は自分のほうから話かけてきた。

「あのときはごめんよ。家^{うち}中がつまんねえから、つい悪い癖がでるんだ」

それがきっかけになり、

「わかるよ。おれたちには逃げ場がないもん」

代吉がいうと山吹は笑った。その笑いは代吉を軽蔑したものではなく、やりきれない生活にたいする共感がこもっていたのである。

山吹のあの尊大というよりほかにない態度も、この和解によって消え去って、監獄、鼻穴、ウンコ、舌長という渾名も自然にだれも口にしなくなった。少なくともネコの仲間たちの人間関係は改善されて、低賃金と工場主の顔色さえ気にしなければ、働きたい職場になってきたといえる。

それからもう一つは、この事件のあと、代吉が予想もしなかった現象がおこった。いままで代吉など眼中になかった仕上工のセイさんが、

「在^{ざい}、ちょっと手をかせ」

と、代吉に声をかけるようになった。セイさんは職長の作るプレス型に組ヤスリをいれるまへの荒仕上をしており、ボール盤で蜂の巣のように穴あけした鋼板をくりぬくとき、人手を必要とするので代吉をよぶのだが、それは以前、山吹の仕事だったため、代吉が尻ごみすると、

「おまえはバカだ。いいから手を貸せ」

と、有無をいわずにいう。セイさんは肩幅の広い男で、代吉にタガネの使いかたや、ドリルのときかなど教えた。ここまではいいのだが、フィゴのそばの金床かなどで鋼板の中心を打ちぬくとき、そろそろ代吉は困ってくる。セイさんが代吉を相手にして、きくも恥ずかしい猥談をやりだすからだ。

「在、おまえ、性典という本を知ってるか」

「セイテン？」

「だからな、女の股のあいだに男のあれをいれて、マサツするとだな、精液がでてよ、つまり、子供が生まれるって寸法よ。そんなことが、くわしく書いてある本だ」

セイさんは手を休めず、タガネの頭を正確にハンマーでたたきながら、両手で鋼板を押さえている代吉にいった。代吉の血は一本に顔にあがってきた。セイさんはかまわず一段とすごいことをいい、あがり口に赤や黄や緑の女の下駄が、なまめかしくぬぎすてある調整部のほうに目をやり、ついでに代吉を見てニヤニヤした。代吉の顔はゆがんだ。代吉も性にたいする欲望が最近とくに強くなってきた。だから、セイさんは口にしたといい、代吉はいわないだけのことなので、とくにセイさんだけが下劣だとは思えなかったのである。

そういうよりも、代吉の母は若いころ茶屋の仲居をしていて、そこで札ピラをきった父と同棲した。その母のいた茶屋が料理屋だったのか、女郎屋だったのか、代吉は知りたくもない。けれども、まじめな男女が夫婦になり、家をかまえて子供を産むのとは、まるでちがっていた。げんに代吉は調整部のある少女がたまらなく好きだった。少女と代吉の関係は、たんに代吉の恋にすぎなかったが、代吉はやましいことを想像しないでもなかった。そういう考えはもちたくないと思っても、その代吉を産んだ父と母とのきたない血が、からだの中をかけめぐるといった。

代吉が少女をはじめて知ったのは、仲間の山吹と和解して心にゆとりができてきたところで、朝の掃除当番の日だった。代吉が工場の裏口へゆくと、そこに紺のジャンパースカートの十四、五の少女が、スリッパと新聞紙にくるんだ弁当箱をもって立っていた。

「きょうからなんです。おねがいします」

切った黒髪がまえにゆれて、色の白い、さびしさをふくんだ目が、代吉をちょっと見た。朝は表門はひらかない。実力のある職長でも禁じられていた。代吉はきのう職長補佐からわたされた鍵で裏口をあけた。代吉たち仲間は交替で六時半に出勤して、プレス、ボール盤、裁断機などに油をやり、職長の練炭火鉢をおこすのである。

「そんないいかた、しないほうがいいよ」

代吉は職場に踏みこみながら、こんな暗い職場にも美しいものがあるのだと少女に見せるように、いくつも箱にはいった色とりどりの光沢のある金属の部品をつかんで、そういった。けれども、油カスとかビクさいにおいが、秋の終りの冷たい空気の中に沈んでいた。その不快なおいもそうだが、この少女のように無垢な心をもっていると甘くみられて、必ず辱しめをうけることになる。そう考えると代吉は、自分の恋人でもないのに気になった。

「こっちだよ」

井戸ばたの横道をつたわってゆくと、手入れのゆきとどいた植木のある門内の帳場にでる。大きな練炭がいてあり、炭酸ガスクさかった。

「ここに腰かけていると、でてくるよ」

「どうもありがとう」

代吉と少女との関係はこれだけで、それ以後、会話をかわしたことはない。しかし、生活にうるお